

女子大学における卒業論文の教育課程に関する研究

今津 尚子・黒田 耕司

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年10月27日受付、2021年12月6日受理)

要 旨

大学における卒業論文は、教育課程に基づいて教員によって指導される授業科目であるが、本稿では、女子大学としての特質を活かした卒業論文の教育課程を探究した。その結果、3年次を、卒業論文の「テーマ」と「題目」を作成するための期間として位置づけ、その教育課程を明らかにした。そこで重要なことは、「文献」や「学術論文」で学んだことを、学生に「小見出し」と「説明文」をつけてまとめさせることであった。さらに、それを、学生相互に発表させることであることを明らかにした。さらに、4年次を、「論文構成」や実際の論文を作成する期間として位置づけ、その教育課程を明らかにした。その他、「文献」や「学術論文」の検索の指導方法、文章作成の指導方法等を明らかにした。さらに、女子大学の卒業論文の指導においては、学生個人が主体的に、そしてまた共同で学修を行うことを指導することが有効であり重要であるということを示した。

【1】緒言

大学における卒業論文は、「卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる」(「大学設置基準」第二十一条)とされたものであり、すぐれた社会人、あるいは教員養成課程においてはすぐれた教育者になるために、一定の課程にしたがって主体的に学び、身につける「学修」として行われるものである。このことから、卒業論文は、一般の研究論文とは異なり、つまり研究論文としてカウントされる論文とは異なり、教育課程に基づいて教員によって指導される授業科目である。従って、そこでは、大学の目的や特性に応じた学生指導の在り方が求められるが、女子大学の卒業論文の指導の在り方については必ずしも明らかになっていない。そこで、本稿では、女子大学としての特質を活かした卒業論文の指導の教育課程について考察を行う。

【2】女子大学における卒業論文の指導の日程と内容

卒業論文の指導においては、何よりもまず、その指導の日程はどうあるべきかということが問題になる。カリキュラム上、卒業論文作成のために活用することができる演習科目が、3年次から4年次にかけて配置されていると仮定した場合、その演習科目を基礎にした卒業論文の指導の日程は、どのように考えることができるのか。3、4年次の期間は、学生には、様々な実習があったり、就職活動があったり、あるいは採用試験等がある期間である。従って、学生は、3年次から4年次の後期頃までに、多くの日数・時間かけて、実習や就職活動に取り組む。そして、それらが終了した頃には、卒業論文の提出締め切りまでに、残り2、3か月ほどしかないということもあり得るわけである。そして、そのような場合、卒業論文の作成は、10月頃から取り組めばよいということになるが、それでは卒業論文の学修は極めて不十分なものとなる。従って、3年次から4年次までの全期間を通した卒業論文作成の指導の日程を明確にし、4年次の後期の期間までに、適切に卒業論文の指導を進めていなければならない。そこで、その期間における指導のプロセスを考えると、3、4年次の演習の期間を、以下のように4期に分けて構想することが適当である。

<3年前期>

3年前期は、4年次の卒業論文作成のための論文の「テーマ」を作成するための期間として位置づけ、以下のような指導を構想することができる。なお、その「テーマ」とは、卒業論文の基調となるものであり、それを基にして、卒業論文の「題目」が設定され、卒業論文が作成されるものである。そして、場合によれ

ば、その「テーマ」は、そのまま卒業論文の「題目」になることもあるものである。

そこで、3年前期のこの期間においては、卒業論文の「テーマ」を学生が見つかることが、最初の主な課題となる。学生が、この「テーマ」を何にするのかを決めることは容易ではないが、いきなり卒業論文の「題目」を決めることはさらに困難である。従って、3年前期のこの期間は、卒業論文の作成における重要な期間となる。3年前期に、学生が、卒業論文として書きたい主な内容、つまり「テーマ」を決められるように指導することが必要となるのである。こうして、卒業論文の指導は、学生に、何を書きたいのか、何を明らかにしたいのかという「テーマ」をはっきりさせることから始まる。

そこで、その「テーマ」を学生にどのように発見させるかということが問題となる。そのためには、大学時代のそれまでに興味を持ったものを整理し、そこから、あるいはそれに関連したものの中から「テーマ」を発見するという指導を行うこともあるだろう。例えば、学生が大学で学んだことや、ボランティア等の社会体験で得たこと等から発見させていくのである。

そこでの指導上の配慮としては、学生に、「漠然とでもひらめいたテーマでもよいから、それに最後までこだわれ」ということである。「確かに自分がやろうとしていることは、たいていすでに誰かによって研究されている。しかしそれがまったく自分と同じ問題意識で研究されているのかといえばそうでもないことが多い。たとえまったく同じに見えるとしても、どこかが違うはずである。その違いを自分に明らかにしていくのが、論文執筆の過程でもある。したがって、自分のひらめきを信じて、最後まで捨てないで生かす方向で考えてもらいたい」とするのである。⁽¹⁾

そうした「テーマ」は、曖昧なものであっても、あるいはいくつもあってもよいのである。何故なら、それが卒業論文の研究として成り立つものであるかどうかということ、後で検討しなければならないことであるからである。つまり、そうした「テーマ」が卒業論文として研究することができるものであるかどうかということは、関連する「先行研究」や「資料」が獲得できるかどうかということによって判断されるからである。その「テーマ」に関係する「先行論文」や「資料」がなければ、卒業論文として作成することは困難だからである。

そこで、3年前期には、学生には、まず、学内の図書館を活用して「テーマ」を探すことを指導しなければならない。そこで、「テーマ」に関する「文献」(文書・書物)が探索されるのである。学生は、「テーマ」に関する「文献」をたくさん集めなくてはならない。その「文献」とは、主に単行本としての「図書」と「雑誌」がある。そして、そこでの具体的な指導として、まず、図書館で関連する「図書」または「雑誌」を「3冊以上」見つけるように指導することである。「3冊以上」という冊数を具体的に設定することが学生には分かり易いものとなるだろう。なお、それらの「文献」は、卒業論文を書く際の参考・引用文献にもなる。そして、学生には、それらの「文献」を探して、さらにそこから学んだことを「小見出し」とその「説明文」をつけて要約しておくように指導することが重要なのである。そして、そうして探した「文献」の内容の要約を、演習の時間に学生に相互に発表させることが肝要なのである。学生は、順番に発表を行い、教員や他の学生からの意見をふまえることによって、卒業論文の「テーマ」を確定していくことができると考えられるのである。

<3年後期>

この時期は、3年前期に明らかにした「テーマ」に基づいて、卒業論文の「題目」を決定する時期になり、そのための指導が必要となる。この時期に、学生には、「テーマ」に基づいて卒業論文を書くための「学術論文」を「3点以上」見つけることが課題となる。それらは、卒業論文の中で中心になりうる参考・引用文献となる。学生は、この時期に、それらを見出し、丁寧に読み、そしてその要約を演習の時間に発表するのである。なお、ここでも重要なことは、学生が、「学術論文」から得たことを「小見出し」とその「説明文」をつけて記録しておくことである。学生は、「学術論文」を自主的に探して読み、印象に残ったところに「小見出し」をつけ、それについて自己の意見をつけ加えて発表するのである。こうした指導は、全国の大学において広く行われているものである。⁽²⁾

こうして、卒業論文の「題目」を設定してから文献を探すのではなく、「学術論文」を見つめながら、「テ

ーマ」をより明確にし、そして「題目」を設定するのである。場合によっては、「テーマ」とは少し関係のない「学術文献」が見つかり、「テーマ」を変更することもあるが、それは認められるのである。⁽³⁾ また、当初の「テーマ」が面白くても「学術文献」が見つからないこともある。そのような場合には、視点を変えて「テーマ」を設定し、そしてそれに合う「学術論文」を検索していくことが必要なのである。なお、卒業論文の「題目」として、「～の一考察」「～について」「～に関する研究」等というものは、曖昧であり「題目」としては好ましくないとされることもあるが、そうしたことに強くこだわる必要はないと考えられる。「テーマ」や「題目」の設定においては、学生が自らそれを行うということが、何よりも重点となると考えられるからである。

<4年前期>

卒業論文を作成するうえでの大きな悩みの一つは、「論文構成」をどうするのかという問題である。この「論文構成」をしておかないと学生は不安になってしまうので、4年前期にそれを行っておくのである。

「論文構成」としては、まず「序章」の前に「目次」、さらにその前に動機、研究目的、課題等を簡単に述べる「はじめに」をつけることもある。そして「各章」があり、「終章」がある。その後に「注釈、引用・参考文献一覧」を記載し、末尾に「おわりに」や「謝辞」を述べることもある。4年前期には、こうした「論文構成」の具体的な「章立て」を、学生が行うように指導する。この「章立て」は、3年次に見つけた「文献」や「学術論文」の目次等を参考にしながら作成すると効果的である。なお、その「章立て」は、卒業論文の制作中に変更・修正することもある。⁽⁴⁾

論文の「章立て」は、一般的には、「序論」「本論」「結論」という3章程度のものが標準であると考えられるが、章の数が必ず3章でなければならないということはない。しかし、学生への指導上、3章程度の「章立て」をするように指示すると、学生は考えやすいのである。学修の進展とともに、その「章立て」は変更・修正すればよいのである。次に、章の次には、節、そして項を考える。この節や項の数も決まったものはないが、全体のバランスを考えて構成するように指導する。こうした「章立て」も、4年前期の演習の時間に発表し、指導教員等から出された意見をふまえてさらに完成させる。

また、4年前期の時期には、卒業論文の中に含むことが必要だと考えられる「アンケート調査」や「資料収集」等の実施が必要なものもある。それらの成果についても、演習内で発表し、出された意見をふまえて検討し、卒業論文に取り入れる。

以上のことから、「章立て」は、「①論文名、②執筆者名、③目次、④概要、⑤序論、⑥本論、⑦結論、⑧参考・引用文献」のようなものにするとうまいと考えられる。

<4年後期>

4年後期には、実際に卒業論文の文章を検討し、決められた文字数に相当する文章を書き上げる。そこで、最大限の効果を発揮するのが、それまでに作成しておいた「小見出し」とその「説明文」である。それらの「小見出し」と「説明文」を連結させて、1つの論文になるようにして、卒業論文を書き上げるのである。最後に、卒業論文は、全体を書き上げた後、まず自分で読み返して、文章や誤字脱字等を修正する。そして、次に、作成された卒業論文を、学生が「相互に」読み合い、さらに誤字脱字や理解しにくい文章の箇所等を出し合い、検討するのである。そして、そのようにして完成した卒業論文を、提出期限内に提出するのである。その後は、卒業論文の要旨集の作成や発表会に向けて準備をする。以上が、3年次から4年次までの卒業論文の制作のプロセスと指導過程である。

【3】女子大学における卒業論文の指導項目

卒業論文の指導の日程の中で必要とされる指導項目には、以下のような内容を含むことが必要になると考えられる。

(1) 「小見出し」と「説明文」の指導

既に述べたように、「文献」や「学術論文」を読み込んで、それらを卒業論文の資料とする際に重要なことは、「小見出し」とその「説明文」をつけておくということである。それらは、卒業論文を実際に作成する際に、極めて重大な効力を発揮する。文章を書いていく際、いきなり文章化し完成させることは著しく困難であるが、この「小見出し」とその「説明文」があれば、それは極めて容易なものとなるのである。それは、長年、わが国の大学における卒業論文の指導方法として継承されてきたものである。⁽⁵⁾

卒業論文の中心が「序論」「本論」「結論」の3つの章からなっているとすれば、それぞれの内容について、多くの「小見出し」とその「説明文」を書いておくように指導することが、卒業論文の指導において極めて重要なのである。例えば、一つの節に3つの「小見出し」とその「説明文」があれば、そこでは、3つの論点があるということになるのである。また、卒業論文が、12000字程度で書くと規定されている場合には、「序論」や「本論」や「結論」に、それぞれ何個の「小見出し」とその「説明文」が必要かということを考えて、それらを割り当てて、配置しておくのである。例えば、「本論」の3つの節には10個の「小見出し」とその「説明文」を割り当てるといったようにである。卒業論文の指導においては、このように「小見出し」とその「説明文」を計画的に書き上げて活用することを指導することが重要なのである。卒業論文が書けない、どう書いてよいかわからない、という学生は、この作業ができていないのである。

(2) 「文献」及び「学術論文」の検索の指導

「文献」や「学術論文」の検索は、以前は学生にとっては極めて困難なことであったが、近年はそれらをインターネットで検索することも可能となり、その労力はかなり軽減されている。しかし、様々な「文献」や「学術論文」を検索し、そこから必要な資料を発見することには、多大な努力と精神力が求められる。そこで、「検索」の指導が必要である。

例えば、「学術論文」においては、「3本以上」の論文を「キーペーパー」として発見させる指導が必要である。⁽⁶⁾ 学生は、多い場合は15本程度の「学術論文」を3年次に発見し、その「小見出し」とその「説明文」の作成を済ませている学生もいる。なお、こうした文献検索は、まず最初は、大学の図書館を使って行う。その際には、様々なキーワードで検索することを指導し、関連する図書を選び出すことができるように指導するのである。

次に、インターネットを使って文献検索を行うことを指導する。この文献検索については、近年の学生は、スマホ等に慣れているため、早く習熟するようである。インターネットを使って文献検索を行うことを指導する際には、まず「ホームページ」を利用することによって文献や情報を探す方法を指導する。図書館や博物館、あるいは行政官庁や学術情報機関は、自身の「ホームページ」を開設しているので、まずそこにアクセスする。そこは、情報がたくさん詰まった「情報の宝の山」である。この膨大な情報の中から、自分に必要な情報を選び出すことを指導するのである。また、例えば、「新聞社」等のメディアのホームページを利用することを指導することも可能である。日々移り変わる情報の収集には、「新聞社」の情報が最も適しているということもある。そして、今日、インターネットを通して、日本ばかりでなく、世界中の「新聞社」の情報を読むこともできるのである。だから、それぞれの「新聞社」のホームページを検索するのである。そして、そこからは、世界のメディアへのリンクも可能である。例えば、ロイターニュース等も日本語版で検索することができる。

あるいは、また、「日本保育学会」のような学会等のホームページから、学会誌『保育学研究』を開き、「学術論文」の検索をするような指導も必要である。また「日本保育協会」のホームページから、論文の検索をするようなことを指導することも可能である。さらに、「文部科学省」や「内閣府」のホームページから、検索をすることを指導することも可能である。さらにまた、インターネットの「検索エンジン」によって検索をすることを指導することも可能である。例えば、「検索CNN」から、記事を見ることである。CNNは、アメリカのニュース専門放送局であるCNNのWebメディアであるが、それは、アメリカだけでなく、世界のニュースを幅広く取り扱っており、経済からビジネス、エンタメまで幅広い領域をカバーしている。そこから、研究資料を探し出すことを指導するのである。

(3) 文章作成の指導

卒業論文の作成の最大の問題は、学生が1万字以上の長い文章を、正確に書くことを困難に感じたり、文章が書けなかったり、作成した文章が意味不明であること等である。そこで、卒業論文の文章作成の指導が必要となるが、その指導の要点は、「分かり易い文を書く」ことを指導するというものである。

卒業論文において、「ねじれ文」というのをよくみかけるが、それは、「主語」と「述語」が合っていない文であり、それが卒業論文の指導上、一番やっかいなものである。そこで、「分かり易い文を書く」ために、第一に、主語・述語関係を明確にした「単文」を書くことを指導するのである。「単文」というのは、「～は、～である」という表現が一つの文である。この「単文」を作成するためには、「重文」や「複文」を書かないということなのである。「重文」というのは、「～は、～であり、そして～である」というように、接続詞でつながれた文であり、「複文」というのは、「～が～であるのは、～である」という具合に、名詞にあたる部分の中にもう一つ文が入っている文である。

「分かり易い文を書く」ためには、第二に、主語と述語の関係を簡潔に書くことや、修飾したり、指示する関係を分かり易くすることである。「分かり易い文を書く」ためには、主語と述語の対応が明確であり、修飾語や指示語が何を指すのかが明確でなければならないのである。卒業論文の指導においても、このことは重要である。従って、修飾語を多用しないことや、なるべく修飾語や比喩を使わないで文章を書くこと等を指導することが必要なのである。

さらに、卒業論文をわかり易くするために、「図表」を作成させる指導を行うことも必要である。なお、「活字」で組むことができるものは「表」、「原図」を基にして印刷するものは「図」とする。そして、その「図表」はなるべく1ページの中に収まるようにし、図表には番号をつけて、「第1-1表」、「第1-1図」等とし、「標題」をつけるように指導するのである。これらの図表を適切に用いると、論文の内容はたいへん見やすく効果的なものになる。

(4) 「参考・引用文献」や「注」の表記の指導

論文において、他者の文や資料等を引用するときには、その出典を明記しなければならない。卒業論文は、研究論文ではないが、研究論文の書き方を学ぶことが求められているからである。他者の文や資料等を引用するときその出典を明記しなければならないということは、他人の研究成果を自分が発見したこととして書くというような盗作になることを避けるためである。そのために、「参考・引用文献」の書き方を指導することが、卒業論文の指導として行われるのである。また、卒業論文の本文中や文末に「注」を用いて書き、分かりにくい箇所を説明したりする。「注」が短ければ、本文中に(カッコ)をつけて織り込み、「注」にその出所を書くことは可能であることを指導する。また、「参考・引用文献」や「注」は論文の最後に置いたり、論文の各章ごとに置いたりもする。こうして、卒業論文では、文献や資料を引用して論を展開する際に、自分の論の中のどの箇所が引用部分であり、どこからが自分の意見であるのかを明らかに示さなければならないのであり、その指導が必要なのである。そのために、引用する際のルールを学生に指導するのである。

「参考・引用文献」を明示する方法には様々なものがあるが、例えば以下のようなものがある。例えば、近年は、本文中に、「注」の場合は(注1)というように「注」だけの通し番号をつけ、引用の場合は(著者名、発表年)を引用文の末尾に表記し、後で章末・巻末に別々に記載する方式もある。しかし、従来は、注釈も引用文献も参考文献も、区別なく本文中に通し番号の小さな肩括弧数字をつけておき、章末や巻末に一括してその通し番号順に参考文献や引用文献を記載している。その際の記述方法は、研究専門領域によって多少異なるが、「科学技術情報流通技術基準」(SIST)の基準を基にして、卒業論文の形式として示すと、以下のような表記の仕方が標準的なものとして考えられる。

①単行本；著者名、『書名』、版、出版社、出版年、引用頁。；(例)坂村健、『グローバルスタンダードと国家戦略』、NTT出版、2005年、272頁。

②論文；著者名、「論文名」、『書名』、編者名、出版社、出版年、引用頁。；(例)村主朋英、「医学分野における動向」、『電子メディアは研究を変えるのか』、倉田敬子編、勁草書房、2000年、59-97頁。

③ウェブサイト中の記事；著者名、「ウェブページの題名」、ウェブサイトの名称、更新日付(入手日付)；

(例) 中央教育審議会、「教育振興基本計画について－教育立国の実現に向けて－(答申)」、文部科学省、2008-04-18、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/08042205.htm、(参照2008-08-13)。

なお、一度参考・引用した文献を再び参照する場合は、直前の文献と同じ場合には、「同上、ページ数」とし、少し前の文献と同じ場合は、「著者名、前掲書(前掲論文)、ページ数」を記述する。

【4】まとめとして－女子大学における卒業論文の指導の特性

女子大学の卒業論文の指導においては、学生個々人が「主体的」に、そしてまた「共同」で学修を行うことを指導することが重要であると考えられる。女子大学においては、とりわけその指導が有効であり、必要であると考えられるのである。その理由は、女子大学の学生は、互いに助け合い、関わり合う精神が高いと思われるからである。従って、その特性を活かし、卒業論文の作成過程で、演習内で発表した際に、互いに質問したり、意見等を伝えるだけでなく、作業を共同で行うということも有効であると考えられるのである。それは、卒業論文を個人が作成するということを損なうものではないと考えられる。このことについては、「親しい友人に自分の論文の話聞いてもらうのもよい。これはかなり有効である。とりわけ行き詰まったときにはきわめて効果的である。・・・『指導教員を利用する』こともそうだが、自分の頭だけで論文を書こうとしないことが大切である」というようにも指摘されるのである。⁽⁷⁾

更に今日、大学の教育における遠隔指導の効用と課題について論じられることが急激に多くなってきた。その効用については、「無駄話がなく、原稿そのものの訂正ができるので時間が短くてすむ。教員は機械的にメールを発信できるので煩わしさがなくなる。そして、努力のあとが手に取るようにわかってくる」というようなことがある。一方で、遠隔指導の限界としては、「無駄話の中から、そして、表情をみながら、指導していく中で問題意識も深まり、わかることとそうでないこととの区別がはっきりするのではないだろうか」とされている。⁽⁸⁾ こうした遠隔指導の在り方については、今後の検討課題になると考える。

【5】引用・参考文献

- (1) 小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』、講談社、2002年、106頁。
- (2) 寺島隆吉「レポートおよび卒論・修論の書き方」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』、第10巻、2008年、149頁。
- (3) 滝川好夫『卒業論文・修士論文作成の要点整理 実践マニュアル』、税務経理協会、平成26年、9頁。
- (4) 同上書、11頁。
- (5) 同上書、27頁。
- (6) 同上書、32頁。
- (7) 小笠原喜康、前掲書、144頁。
- (8) 佐藤公代「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(11)－メールによる卒業論文の指導に関する効用と限界－」、『愛媛大学教育学部紀要』、第54巻1号、2007年、35頁。

A study on the curriculum of graduation thesis at women's universities

Shoko IMAZU, Koji KURODA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

Since graduation thesis at a university is a subject taught based on the curriculum, this paper explores the curriculum of graduation thesis that makes use of the characteristics of women's universities. As a result, in the third year, we positioned it as a period for creating "themes" and "subjects" of graduation thesis, and clarified the curriculum. It turned out that it was important to have students read "literature" and "academic papers" and make "headings" and "explanatory texts" of the contents. And, it was clarified that it was important to make the student announce it.

In addition, the curriculum of "composition of thesis" and the preparation of the thesis in the fourth year was clarified. And, the method of the retrieval of "literature" and "academic paper" and the teaching method of writing were clarified. And, it was clarified that it is important to teach each student to study independently and jointly in the guidance of the graduation thesis of the women's university.

Keywords : graduation thesis, literature, academic paper